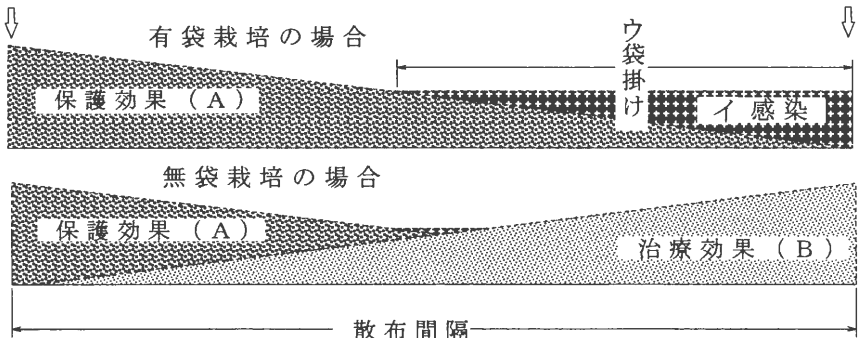


事項	有袋栽培のりんご果実におけるすす斑病の発生要因と防除対策		
ねらい	<p>近年、有袋栽培のりんご果実ですす斑病が多発する傾向にある。しかも、薬剤の散布体系が同じ園地の同一品種における比較でも、有袋果での被害が特異的に目立っている。有袋栽培のりんご果実では、袋掛け後に散布する薬剤の治療的な防除効果が有効に働かないため、年によってはすす斑病が多発する。この対策として、袋掛け前の特別散布（実洗い）が最も効果的であるので、その普及・指導の強化を図るため参考に供する。</p>		
指導内容	<p>1 発生要因（下図参照）</p> <p>(1) 有袋栽培</p> <p>ア 散布後の降雨等により薬剤の保護効果(A)が徐々に低下する。</p> <p>イ 降雨等に伴う冷涼・多湿な好適条件下で病原菌の活動が高まり、多くの果実に病原菌が感染する。</p> <p>ウ その果実に袋が掛けられる。</p> <p>エ 袋の掛けられた果実には次回以降の薬剤が付着しないため、病原菌は徐々に増殖し始める。</p> <p>オ 50～70日の潜伏期間を経て発病し始め、大きな被害を生じる。</p> <p>(2) 無袋栽培</p> <p>エの薬剤散布が保護効果のみならず、イの果実に対しても治療効果(B)を発現するので、大きな被害を生じない。</p> <p>ア 袋掛け前の薬剤散布</p> <p>エ 次回の薬剤散布</p>  <p>図 有袋栽培のりんご果実におけるすす斑病の発生要因</p> <p>2 防除対策</p> <p>定期散布の5日後以内を目安に袋掛けを行う。その後も袋掛けを継続する場合は、次の定期散布までの間に袋掛けを予定している樹を対象に有効な薬剤による特別散布(実洗い)をしてから行う。</p>		
期待される効果	有袋栽培におけるすす斑病防除の徹底により、被害の軽減が図られる。		
利用上の注意事項	薬剤はその時期の基準薬剤から選ぶ。		
担当	青森県りんご試験場 病虫肥料部	対象地域	県下全域
発表文献等	北日本病虫研報 51		

【根拠となった主要な試験結果】

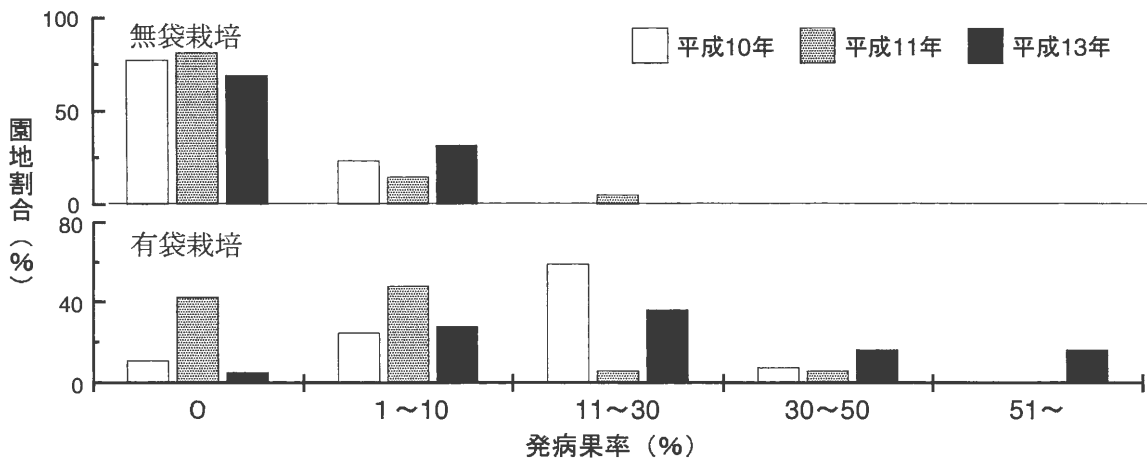


図1 すず斑病の発生実態 (平成10~13年 青森りんご試)

表1 各種薬剤における保護効果(防除価)の推移 (平成9、11年 青森りんご試)

薬剤名	倍数	平成9年			平成11年		
		薬剤散布後日数			薬剤散布後日数		
		3	11	17	1	11	17
スペックス水和剤	600	92	72	64	100	38	31
パルノックス水和剤	600	95	64	61	100	46	11
ユニックスZ水和剤	500	—	—	—	100	13	20
プラウ水和剤	1,000	—	—	—	100	67	14
キノンドー水和剤(80)	1,200	92	79	83	100	79	83
アントラコール水和剤	500	88	71	64	100	50	20
ベフラン液剤	1,500	93	34	65	—	—	—
アリエッティC水和剤	800	99	93	95	—	—	—
オーソサイド水和剤	800	99	87	59	—	—	—

(注) 1 薬剤散布後、所定の日数が経過したふじの果実に高濃度の病原菌を接種した
 2 防除価は下記の計算式で算出し、100に近いほど薬剤による保護(防除)効果が高いことを表す
 防除価 = (薬剤無散布での病害発生量 - 薬剤散布後の病害発生量) ÷ 薬剤無散布での病害発生量 × 100

表2 各種薬剤の治療効果(平成11年 青森りんご試)

薬剤名	発病果	発病指数	防除価
スペックス水和剤	25	0.3	93
パルノックス水和剤	30	0.4	90
アントラコール水和剤	40	0.6	85
キノンドー水和剤(80)	10	0.3	93
アリエッティC水和剤	5	0.1	98
ベフラン液剤	5	0.6	85
オーソサイド水和剤	45	0.5	88
無散布	100	4.0	—

(注) 1 接種7日後に薬剤散布を行った
 2 発病指数は病斑の形成程度により0(無)~4(甚)の5段階に区分した

表3 特別散布の防除効果(平成13年 青森りんご試)

被袋時期	特別散布なし		特別散布あり	
	調査果数	発病果率	調査果数	発病果率
6月18日	96	21.9%	—	—
6月22日	93	57.0	97	4.1%
6月27日	93	58.9	82	4.5
7月3日	86	59.3	94	8.5
無袋	100	0	—	—

(注) 1 6月14日に薬剤を散布したあと、7月9日まで無散布で管理した
 2 特別散布は各時期とも、被袋当日に行った